

“Don't give me a fish, but teach me how to fish.”

実践場所	香川県	三木高等学校	実践者	出水 結花
対 象	高校1年生(63名)	時間数	5時間(50分×3, 80分×2)	
担当教科	英語	実践教科	コミュニケーション英語 I	
ねらい	<ul style="list-style-type: none"> <li>異文化に触れ、違いを尊重できる姿勢を育てる。</li> <li>子どもの人権問題について学び、自分にできることは何か考える。</li> <li>現地で活躍する日本人や日本企業に関心を持たせ、職業選択の参考にさせる。</li> <li>英語学習や教育の大切さを見つめ直すきっかけを与える。</li> </ul>			
実践内容	回	プログラム	備 考	
	1	Introduction: where is Daisy going? (動機付け) <ul style="list-style-type: none"> <li>夏休みの予定についてグループで話し合う。</li> <li>&lt;ジグソー学習&gt; 先生(Daisy)がどの国へ行くのか考える。</li> <li>現地の学生宛に手紙を書く。</li> </ul>	写真 世界地図 便箋	
	2	“The Dark Side of Chocolate” (子どもの人権) <ul style="list-style-type: none"> <li>カカオ農園の児童労働や、エチオピアの子どもたちの暮らしや学習環境について話し合う。</li> <li>途上国の子ども達のために私達ができることは何か考える。</li> </ul>	ワークシート 写真、映像 フェアトレードチョコ コレート	
	3	多様な価値観を受け入れよう (異文化理解) <ul style="list-style-type: none"> <li>&lt;フォトランゲージ&gt; エチオピアに対して持っている自らの固定概念に気付き、異文化理解・他者理解の大切さを学ぶ。</li> <li>自分自身の生き方について意見を言い合う。</li> </ul>	パワーポイント 写真 アンケート	
	4	Let's read letters from Ethiopia! (国際語としての英語) <ul style="list-style-type: none"> <li>KSBの動画を見て、現地の小学校の様子を知る。</li> <li>エチオピアからの手紙をグループごとに解読し、発表する。</li> <li>&lt;ランキング&gt; 英語の勉強の仕方を振り返る。</li> </ul>	ワークシート KSBの放送 地図、手紙、写真 カード	
	5	“Don't give me a fish, but teach me how to fish.” (国際協力) <ul style="list-style-type: none"> <li>コーヒーの発祥について学んだ後、コーヒーを試飲する。</li> <li>&lt;スパイラル&gt; 貧困がどのように連鎖していくか考える。</li> <li>協力隊やKAIZENプロジェクトについて知る。</li> <li>諺の意味を踏まえ、国際協力や将来の夢について考える。</li> </ul>	絵本 ワークシート カード 写真、映像 コーヒー豆	
成 果	回を重ねる毎にエチオピアに親しみが持て、「関わりたい」という気持ちが強くなったようだ。それだけでなく、自らの生き方や英語学習について深く考えるきっかけを与えられた。			
課 題	国際協力への興味関心を、生徒自らが具体的行動に移した時に初めてこの取り組みが成功したと言える。適宜手助けしながら、生徒の今後の変容を根気強く観察していきたい。			
備 考	※ 第1回は派遣前に実施。 ※第3回は学年一斉(150名)の人権・同和教育HRに実施。			

## [ 授業実践の詳細 ]

### 1 時限目 「タイトル Where is Daisy going?」 (動機付け)

#### 1 子どもの活動の流れ

- ① 夏休みの予定についてグループで話し合う。
- ② 教師の行き先について、写真や地図をヒントに、グループで協力して考える。〈ジグソー学習〉
- ③ エチオピアの子ども達に、英語で手紙を書く。

※生徒の活動はすべて英語によるものとする。

#### この時限のねらい

- ・ アフリカやエチオピアについて自分はあまり知識がないということに気づく。
- ・ 英語の手紙の書き方を学ぶ。

#### 2 子どもの活動の成果・反応

- ◇ 「エチオピア」という答えが分かった時、生徒達はとても驚いた様子だった。
- ◇ 感想記入用紙には、「エチオピアの人と友達になりたい」、「帰国後の授業が楽しみ」などと書かれていた。
- ◇ まだまだエチオピアに対する知識が少ないため、手紙に何を書いて良いか分からず戸惑う生徒が多かったので、自分自身についてや、日本について紹介するよう指示した。

#### 3 使用した教材

〈教材1〉 ヒントに使った写真とキャプション



〈教材2〉 生徒の書いた手紙



## 2

### 時限目「タイトル “The Dark Side of Chocolate”」（子どもの人権）」

#### 1

#### 子どもの活動の流れ

- ① 教科書で習った、カカオ農園の児童労働について、図や映像を見て問題点を挙げる。
- ② エチオピアの学校や子ども達の衣服などの写真を見て、気付いたことを話し合う。
- ③ 世界の子ども達の権利を守るために、自分達ができることについて意見を出し合う。
- ④ 「フェアトレード」や「持続可能な開発」について学んだ後、フェアトレードチョコレートを試食する。

#### この時限のねらい

- ・ 幼い子ども達が学校にも行かず、低賃金で過酷な労働を強いられているという現状に対し、問題意識を持たせる。
- ・ 支援の一形態として、「フェアトレード」や「持続可能な開発」の考え方を理解させる。

※生徒の活動はすべて英語によるものとする。

#### 2

#### 子どもの活動の成果・反応

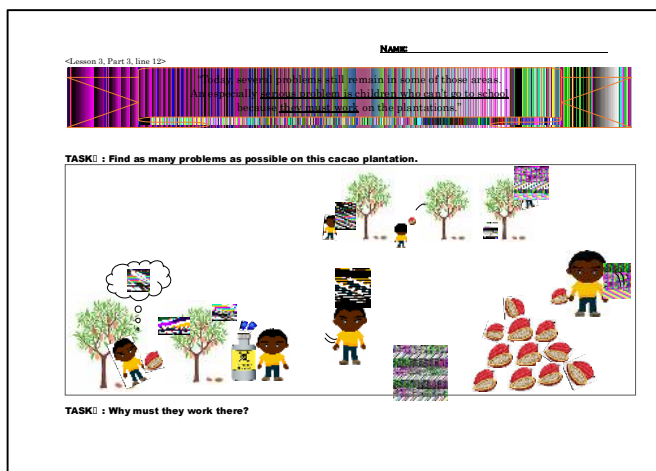
- ◇ 実際の映像や写真を見ることで、教科書だけでは分からない、アフリカの子ども達の様子がよく分かった様子だった。特に、カカオ農園で働く子ども達の映像は、想像以上の過酷さに言葉を失う瞬間もあったが、終始真剣な表情で画面を見ていた。
- ◇ 感想記入用紙には、「自分が何気なく買っているチョコレートが、自分より小さな子ども達の過酷な労働によって作られていると知り、ショックだった。」、「学校で勉強できている自分は幸せなんだと思った。」、「支援には募金くらいしか思いつかなかったけど、フェアトレード商品を買うというような簡単なものもあることが分かった。」、「フェアトレード商品を見つけたら積極的に買うようにしたい。」などと書かれていた。

#### 3

#### 使用した教材

<教材3> PRO-VISION English Communication I Lesson 3

<教材4> カカオ農園の図(自作)



<教材5> 世界がもし 100 人の村だったら(テレビ番組)第4回

<教材6> 「フェアトレード」について(プレゼンテーションソフトのスライドをTV画面に映したもの)



<教材7> 試食したフェアトレードチョコレート



### 3 時限目「タイトル 多様な価値観を受け入れよう」(異文化理解)

#### 1 子どもの活動の流れ

- ① アフリカからの輸入品を知ることで、日本と関わりが深いことを知る。
- ② 教師が現地で撮った写真を見て、「それが何であるか」、「人々は何をしているのか」などの問いかけについて、グループで話し合う。<フォトランゲージ>
- ③ 身の回りで他者理解が十分にできていないために起こるトラブルについて考え、自分自身の生き方を見つめ直す。

#### この時限のねらい

- ・ 文化・価値観の違いに気づき、それらを理解しようとする姿勢を育てる。
- ・ グループでの話し合いを通して、異なる意見を受け入れられる姿勢を育てる。

※学年一斉(150名)の人権・同和教育HRに実施。(使用言語は日本語)

## 2 子どもの活動の成果・反応

- ◇ 机の配置から、6人グループで話し合うのが困難そうだった。
- ◇ 身の回りのトラブルとして、「LINE の既読スルー」や「電車内のマナー」などを取り上げたが、自分達に身近な話題だったため食い付きが良く、話し合いも盛り上がっていた。
- ◇ 感想記入用紙には、「相手の価値観や意図を想像して考え、理解することの大切さを学んだ。」、「エチオピアの人と同じように、モノの豊かさよりも人とのつながりを大切にして幸せになりたい。」、「相手と自分の違いを個性として認めていきたい。」、「日本にいる外国人が、『外人や！』と指を指されるのが嫌なのは知らなかった。」などと書かれていた。

## 3 使用した教材

<教材8> 『国際理解教育実践資料集』p11 2013年 JICA 地球ひろば

<教材9> フォトランゲージに使った写真の一例



## 4 時限目「タイトル Let's read letters from Ethiopia!」（国際語としての英語）

### 1 子どもの活動の流れ

- ① KSB 瀬戸内海放送の取材を見て、現地の子ども達や小学校の様子を知る。
- ② エチオピアの子ども達からの手紙をグループで協力して解読し、全体に発表する。
- ③ 「英語が使えるようになるために最も大切なもの」について、グループで話し合っカードを並べる。〈ランキング〉
- ④ 協力隊の方や現地の高校生のメッセージを聞き、自分の英語学習を振り返る。

※生徒の活動はすべて英語によるものとする。

### この時限のねらい

- ・ 普段勉強している英語は、自分と世界をつなげてくれる道具だということに気付かせる。
- ・ 外国の人々と英語でコミュニケーションを取るには、「伝えようとする気持ち」が最も大切だということに気付かせる。



## 2 子どもの活動の成果・反応

- ◇ 協力隊の方のビデオメッセージは、短く簡単なものだったが、生徒の心に響いたようである。
- ◇ エチオピアの子ども達の手紙は、文法的なミスがあったり文字に癖があったりして、決して読みやすいものではなかったが、その分生徒達は一生懸命に解読しようとしていたので良かった。
- ◇ <ランキング>では様々な意見が出たので、黒板にカードを貼らせて発表させた。
- ◇ 感想記入用紙には、「初めて外国から手紙を受け取って不思議な気持ちになった。」、「エチオピアの子ども達の手紙から、伝えたいという気持ちが伝わってきた。自分も、間違うことを恐れず、気持ちを大切に英語を話したい。」、「書く方は伝えようとする気持ちが大切だけど、読む方も相手のことを理解しようとする気持ちが大切だと思った。」、「英語は世界を1つにする magical word! 英語の勉強を頑張って、世界に通用する人になりたい。」などと書かれてあった。

## 3 使用した教材

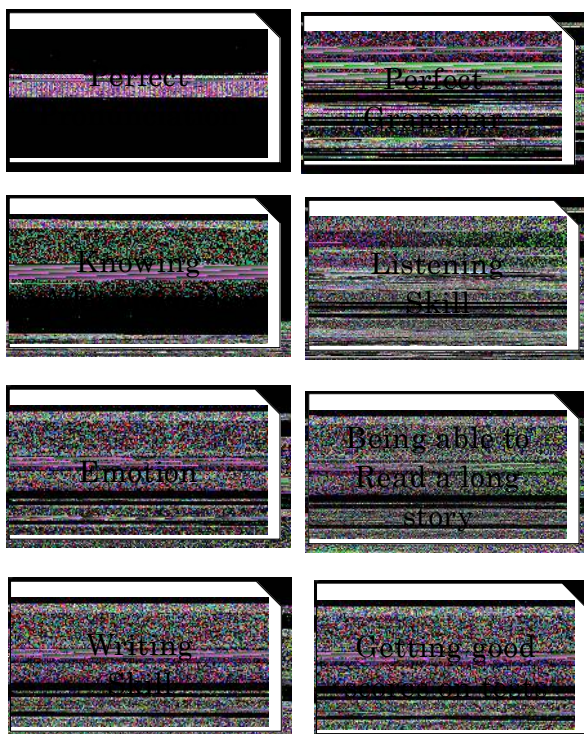
<教材10> KSB 瀬戸内海放送 9月4日放送

『世界のためにできること 第17回 ~肌で感じた国際協力 香川の先生がエチオピアへ~』

<教材11> エチオピアの子ども達からの手紙



<教材12> 「英語が使えるようになるために最も大切なもの」 ランキングカード



## 5 時限目「タイトル “Don't give me a fish, but teach me how to fish.”」（国際協力） —●

### 1 子どもの活動の流れ

- ① コーヒーの発祥やコーヒーセレモニーの説明を聞いた後、エチオピア産コーヒーの試飲をする。
- ② 「貧困がどのように連鎖していくか」について、グループでカードを並べて考える。〈スパイラル〉
- ③ 協力隊の方々や KAIZEN プロジェクトについて学ぶ。
- ④ コーヒー農家の Mirutse(ムルース)さんが引用した、タイトルにある諺の意味を踏まえ、国際協力や自分の将来について考える。

#### この時限のねらい

- ・ 世界で活躍している日本人や日本企業について知ること、日本人であることに誇りを持たせる
- ・ 国際協力や外国で働くことを視野に入れつつ、自分の好きなことや夢について考えさせる。

※生徒の活動はすべて英語によるものとする。

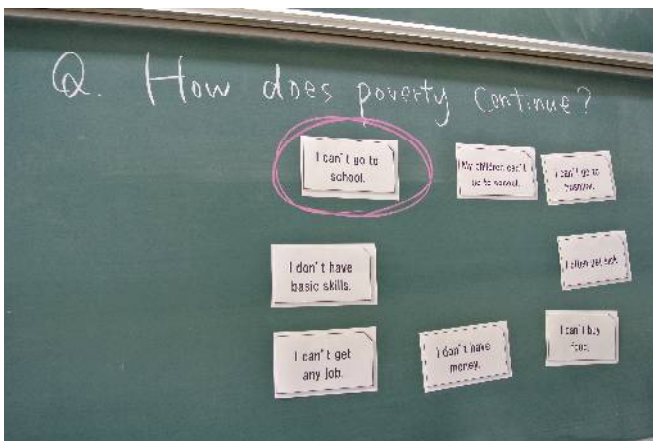
### 2 子どもの活動の成果・反応

- ◇ 感想記入用紙には、「エチオピアのコーヒーは濃く感じた。先生が現地で飲んだのはもっと濃そうな色だった。」「青年海外協力隊の人たちは、英語が喋れるだけではなく、特技を持っているから海外でも役に立つのだと思った。」「整理整頓は私たちにとっては普通のことだけど、エチオピアの工場では訓練されないといけないということに驚いた。」などと書かれてあった。
- ◇ 「将来国際協力の仕事をしたい。」と言ってきた生徒がいた。
- ◇ コーヒーの苦手な生徒のために、エチオピアで購入した紅茶を用意した。

### 3 使用した教材

<教材13> “The Legend of Ethiopian Coffee” Africa Rikai Project（絵本）

<教材14> 「貧困がどのように連鎖していくか」スパイラルカード



## ■ 全体を通して

### 1 授業の様子

<写真1> エチオピアで購入した世界地図



<写真2> ランキングカードを並べている様子



<写真3> 第3回 学年一斉の人権・同和教育HRの様子



### 2 参考文献・資料

- 1) 『国際理解教育実践資料集』p11 2013年 JICA 地球ひろば
- 2) 田中優・樫田秀樹・マエキタミヤコ編 『世界から貧しさをなくす30の方法』2006年 合同出版